

尊いものたちから学ぶこと

「人間をみつめて」

根岸優香^{ゆか}

私が、神谷美恵子さんの本を読むきっかけとなったのは、母の実家の本棚を見ていた時、母が「大きくならしたら読んでもらおうと思って、大切に読っておいたの」と口にしたこと。

神谷さんは、精神科医で、国立療養所長島愛生園を中心に、ハンセン病者のためにさまざまな活動をされたことを知った。ご多忙の中、長い間、遠い自宅から時間を見つけては、島へ行き、診療をされたようだ。患者さんや職員の方とともに悩

み考える姿、ありふれた日常の中にある美しい景色に目を向ける姿、自らが病を患いながらも他を気遣う姿、神谷さんのさまざまな姿が窺えた。彼女は温かく、穏やかで、優しく、深い愛情に満ちていて、それでいて謙虚な方だったのでという印象を文面の言葉一つ一つから受けた。

彼女の優しさは、明るく「頑張れ」と言葉をかけるのではない。側にいて、ただうなずきながら話を聞いて、そっと手を握ってくれるようなものに寄り添っていくもの。本書を読み、一番印象に残った言葉は、「なぜ私たちがなくてあなたが？ あなたは代わって下さったのだ」というもの。私の通う小学校では、人権教育が行われていたり、韓国の文化を学ぶことがあり、韓国の方が指導にいられていた。私が五年生の時から、女子は、プチェチュムという韓国の伝統舞踊を、男子はサムルノリという韓国の楽器を演奏する試みが始まった。当時、牛窓で開催されたエーゲ海フェスティバルで初披露した時には、山陽新聞の一面に大き

く取り上げられたほど。それがきっかけで、いろんな場所で踊る機会を得、長島愛生園、邑久光明園でも披露させていただいた。長島愛生園では、他に、本書でも、朝鮮婦人という言葉が出てきたが、韓国の方も多くおられると伺い、『ふるさと』を韓国語で歌った。ステージで歌っている時、涙を流されている方を目にした。全ての発表が終わる、中央の通路から多くの皆さんの拍手の中、退場する際、一人のおばあさんが手を出され握手してくださいだったので、涙をこらえながら「ありがとうございます。その温かいおばあさんの手には指がなかった。神谷さんの言葉で、なぜか、そのときのことがい出された。」

本書で一番印象に残ったのは、強制隔離を行った光田健輔先生のお話。戦後、ハンセン病が治る病気になると、患者さんを強制的に隔離収容するという政策が非人道的であると批判されるようになり、光田先生が主張された方針が、広く非難された。私が小学生の時、愛生園や光明園を訪れる

機会があったのを思い出した。入所者の方とお話をしている時に、「私にもあなたくらいの孫がいたのね」とおっしゃった。一度強制隔離をされ、家と縁を切ったような形になると、ハンセン病が治っても、さまざまな理由で故郷に帰ることができない。長い年月が経つほど難しくなり、一生を療養所で過ごす方も多い。神谷さんは、強制隔離は、日本の社会を感染から守る意味も大きかったことは明白だが、患者さんの生活を守るといふ大切な意味があったとして、光田先生の方針をむしろ肯定している。隔離された患者さんについて、過去において、私たちが感染しないですんだことの中には、あの人たちの生涯の犠牲が潜んでいるともいえると述べている。時は流れ、人々の歴史に対する考え方も変わってゆく。強制隔離は、非人道的であったかもしれない。しかし、当時、ハンセン病者への差別はあまりにも酷く、治ったとしても、差別、偏見は続くものだった。神谷さんが言うように、光田先生は、さまざまなことを考慮し、

強制隔離という方法でハンセン病者のことを守ろうと考えた。治らないものとされていた時代にハンセン病者と向き合い、手を差しのべた。病のことがよく分からない状況で、そのように手を差しのべるなど、そう簡単にできるものではない。本書から分かることは、光田先生が、ハンセン病者のためにご尽力なされたことは間違いない事実であるということ。実際に現場で光田先生の姿を見ていたからこそ神谷さんは、否定しなかったのだろう。

本書を読み、当時のハンセン病に関することを詳しく知ることができた。そして、今、私たちがこうして在るのは、長い歴史の中で多くの人々の努力、苦悩、犠牲のもとに成り立っているのだと悟った。そういう人々について広く知る必要があると考えた。私は、生きていることを当たり前のように思うのではなく、生かされていることに感謝し、恵まれた世界に在ることを実感しなければならぬ。

生きているその「存在」一人ひとりが尊いものであり、非常に大切なものだと感じることができた。現在、私は、大学で歴史を学んでいる。こうであると決めつけるのではなく、一人ひとりの尊いものについて深く知り、時代背景も考えながら、多角的に物事を見て、理解を深めていきたい。